



ゴニチハ

Yottaは、鬼という存在に着目しながら作品制作を続けてきました。人々にとって鬼とはどのような存在を表現したものだったのでしょうか。そこに多義性は認められるものの、共通の特徴として、人々の理解の外、計り知れない対象を指しました。技術を持った異邦人、異形、病や災い、自然現象など（天候を司る風神や雷神も鬼形で表現されます）。それは必ずしも悪魔的存在だけを指しません。

時化【シケ】は、荒天により海が荒れることを意味します。時化ると不漁になる事から意味が派生して、シケた面、シケた話など“うまく行っていない事”も指すようになりました。

時化はいつも理不尽にやってきて、私たちは惑いながらも抗い乗り越えようとしています。必要なのは技術的発想なのか、精神的強さなのか、呪術的情念なのでしょう。私たちは遠ざかっていく時間切れの日常を追いかけながら、常に非日常的選択を迫られます。

社会が時化する時、暗雲の雲間から覗く鬼は、吉なのでしょうか？ 凶なのでしょうか？



#yotta



#時化の雲からゴニチハ

1 花子 Hanako



お土産品として、ひと昔前までこの家にも必ずあった「こけし」。東北の温泉地で伝わってきたその少女の姿の木製人形は、幼児のために作られたおしゃぶりや人形玩具がルーツと言われ、純粋な愛情や善意、美意識が表現されています。パルーン製のネオ伝統こけし《花子》はその少し不思議な存在に込められた、忘れられた呪術的意味と玩具的意味を取り戻すことを試みるため、巨大な少女像として公共空間に出現します。体に描かれる紋様は東北各地に伝わる紋様と新しい紋様を組み合わせたもの。寝転がっているときもあれば、高くそびえ立ち足湯が設置されている時もあります。彼女は時々言葉を発し、稀に歌を歌います。

3 ヨタの青空カラオケ Yotta's Karaoke under the Blue Sky



大阪府の天王寺には通称「青空カラオケ」という、公園を不法に占拠しての違法な路上カラオケ店が軒を連ねていました。それらは、違法性や騒音問題、治安悪化などの様々な問題を孕みながらも、極私的な歌が鳴り響き、その場の人々を半ば強引にも巻き込む空間として30年以上地元で愛されてきました。しかしオリンピックの誘致運動などにより、2003年に強制撤去され街から姿を消します。大きな力によって急激な変容を迫られた生活や文化、そして分断してしまったコミュニケーションは再び接続可能でしょうか。私たちは《ヨタの青空カラオケ》によって、境界が溶け合うような場所とシステムを構築できないかと夢想します。

2 金時 Kintoki



デコトラのきらめく照明が高速道路を怪しく照らし、「石焼き芋屋」の独特の歌声がまだ「騒音」になる以前、公共空間と私空間は緩やかに区分され、かろうじて路上には想像性や創造性、コミュニケーションが残っていました。戦後復興の中で発生した独特の文化である移動式の「石焼き芋屋」は、以前は日本各地で見られたましたが、食文化の変化や人々の意識の変化と共に現在ではほとんど姿を消しました。高級セダン車にデコトラの装飾を積載した《金時》は、極めてパーソナルな空間をパブリックに介在させる「石焼き芋屋」として、時に日常に溶け込み、時に排斥されながら、境界線や曖昧さを公共空間・ストリートから問う作品です。

4 くじらのカーニバル Parade of Whales



和紙と針金だけで立体物をつくる青森県のねぶたは、七夕や精霊送りなどの民間習俗が一体となり生まれました。その技法から制作された「ミンククジラ」を模した《くじらのカーニバル》は、日本国内に4ヶ所ある沿岸小型捕鯨基地の1つ、宮城県石巻市の鮎川浜でのリサーチから誕生しました。日本は2019年に国際捕鯨委員会から脱退、商業捕鯨を再開し、捕鯨を巡って国際的に複雑な立場に置かれています。日本古来より続いてきたクジラを食べ、敬い祀る「鯨まつり」や「鯨塚」「鯨神社」などの、クジラとヒトの複雑で豊饒な関係を紐解き、人間中心主義を超えて、他種や地球・環境などとの、豊かな交感を取り戻すプロジェクトです。

2 穀 Tanatsu



大砲のような機械で圧力をかけ、大きな音と共に勢いよく開放することで米を10倍に膨らませる「ポン菓子」。私たちが幼い頃には住宅街にトラックが度々停車し「ポン菓子」を実演販売していました。ポン菓子機（穀類膨張機）は太平洋戦争末期の食糧難の中、吉村利子さんによって再発見され、北九州で第一号機が誕生。戦時下の軍用品製造の傍らで製造され、軍事兵器と異父兄弟でした。現在も世界中で戦争や紛争は繰り返され、高度にグローバル化の進んだ社会で、私たちは直接／間接的に、または全くの無自覚に世界中の「戦争」に参加しています。《穀》はお米のお菓子から、戦争と平和、生と死を見つめ直す作品です。

5 ワンダーえびす丸 Wonder Ebisu-Maru

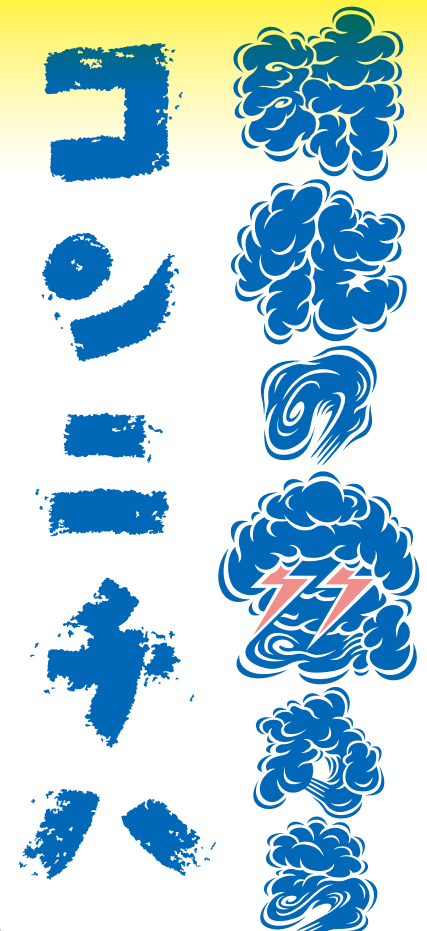


「家船/えぶね」は、瀬戸内海や西九州の海に実在した日本の海上漂泊民の総称です。漁をしながら船で家族と共に暮らし、海の上で一生のほとんどを過ごす彼らは独自の文化を築き、過酷な海の世界を力強く生き抜いてきました。しかし、マージナルマン（境界人）として深刻な差別を受けたとも言われています。海に囲まれた日本列島では、海の向こうからやってくる災いや幸いに臆病にならざるをえないのかもしれない。平らな土地に安住し多くのものが見えなくなっている現代、私たちは海を身体に取り戻す必要に駆られています。この《ワンダーえびす丸》を、平地の凝り固まった、あらゆる価値観のゆらぎの中に浮かべたいと考えます。



- 1 花子／大分駅前
- 2 金時・穀／竹町ドーム広場
- 3 ヨタの青空カラオケ／府内5番街
- 4 くじらのカーニバル／駅前地下道
- 5 ワンダーえびす丸／西大分地区

Yottaのアトリエと展示会場



Yotta/ヨタは、木崎公隆・山脇弘道からなる現代アートのユニット。2010年結成。ジャンルや枠組み、ルールや不文律など、あらゆる価値観の境界線を発表の場としており、それらを融解させるような作品制作を行っている。現在は、自分達のアイデンティティから世界のカチを捉え直す作品シリーズを制作中。

